様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　６月　１日現在

研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2007～2009
課題番号：１９３２０１０２
研究課題名（和文）　東アジア諸国における都城及び都城制の比較を通じてみた日本古代宮都の通時的研究

研究課題名（英文）　Diachronic Research on Ancient Imperial Capitals in Japan: A Comparison of Capitals and Capital Systems in Various Countries in East Asia

研究代表者
橋本　義則　(HASHIMOTO　YOSHINORI)
山口大学　・人文学部　・教授
研究者番号：６０１６４８０２

研究成果の概要（和文）：中国・韓国の研究者と研究協力体制を組み、比較史的研究方法と遺跡の現地踏査に基づき、多面的な観点から日本の古代宮都を通時的に検討した。特に東アジアに共通し、日本の古代で特徴的な複都制に重点をおいて検討した結果、複都制は中国では両都制と五京制に代表される多様な在り方を示し、また朝鮮では複都制が 10 世紀にまで下り日本の古代に影響を与え得ず、これらの事実などを前提として日本古代の複都制は、中国や朝鮮などに見られない独自の特徴を持つことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：A study team was formed with researchers from China and Korea to conduct a diachronic study of ancient imperial capitals in Japan. The study incorporated a variety of perspectives and was based on comparative-historical research and examination of ruins. Similarities among capital cities and capital systems especially existed in East Asia. Research focusing on the distinctive multiple-capital system in ancient Japan indicated there were various multiple-capital systems, as typified by the 2-capital and 5-capital systems in China. The multiple-capital system also existed in Korea until the 10th century, but did not impact ancient Japan. Based on these facts, it became clear that the multiple-capital system in ancient Japan possessed unique characteristics not seen in countries such as China and Korea.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	8,600,000	2,580,000	11,180,000
２００８年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
２００９年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
総　計	14,400,000	4,320,000	18,720,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：東アジア・都城制・都城・宮都・通時的・比較史

１．研究開始当初の背景
日本・中国・韓国など東アジアの諸国が今日に至るまで様々な面で共通する文化要素を保有し、しかもその淵源の多くが歴史的に中

国に求められることは周知の通りである。そのような文化要素を共有する中で中国の影響を受けた日本・朝鮮・渤海・ベトナムなど周囲の諸国において政治制度と密接に関わって出現したのが都城と都城制である。中国の都城は古く殷周あるいはそれ以前に淵源し、中国古来の都城建築技術を洗練させながら、また、北方遊牧民の文化的影響も受けつつ近代に至るまで各王朝の首都などで維持されてきた。朝鮮あるいはベトナムなど王朝が成立した諸国においても同様に近代に至るまで都城は維持された。従ってこれらの諸国においては地中に埋もれた都城遺跡ばかりでなく、実際に地上に遺る遺構を実見した上で文献史料と照合しながら様々な検討を加えることが可能である。これに対して日本やかつて中国東北部に存在した渤海などでは古代の終わりとともに都城及び都城制は崩壊してしまい、今日では地中に埋もれているため、発掘調査によってはじめてその遺構を目にすることが可能となる。

これら様々な形で遺存した各国の都城についてはそれぞれの国の歴史を専門とする歴史研究者や考古研究者によって研究が進められ、個々には注目すべき成果を挙げつつあるが、それらを東アジアという中国を中心とした文化圏の中に置いて比較検討する視点に乏しいと言わざるを得ない。

都城あるいは都城制を東アジアという観点から見てみると、これらの諸国では共通の要素をそこに見出しうるとともに相違点、すなわちそれぞれに独自の点を見てとることが容易に出来る。中国の影響を受けて周辺諸国で成立・展開した都城・都城制が必ずしも中国のそれをそのまま受け容れたわけではなく、それぞれの国の文化・歴史、あるいは政治的成熟度などによって受容の在り方は様々である。

このような東アジア諸国に共通する政治制度でありながら多様な展開を遂げた都城制とそれに基づき実際に建設された個々の都城について、個々の都城を存立せしめている当該国の政治制度・社会状況あるいは文化基盤など、その歴史的諸要素、さらに都城を構成する様々な個別の要素に分け、詳細に各国間の異同を比較検討し、具体的な共通点と相違点を逐一確認すること、すなわちこれらの国々における政治・文化の受容と変容に関する具体相を明らかにすることに主眼を置き、その上でさらにそのような共通点と相違点を生み出した東アジア諸国の実態に迫り、従来ともすれば陥りがちな抽象的比較史ではなく、都城及び都城制という極めて具体的な実体を通じて具体的に把握する比較史を中国・韓国の研究者も組織することで実現すべく、先に交付を受けた科学研究費補助金（基盤研究（A）「東アジア諸国における都城制及び都城に関する比較史的総合研究」、研究代表者橋本義則、課題番号10001609、平成16－18年度、以下基盤研究（A）と略称）で総合的な研究を行った。その成果は、平成22年度科学研究費補助金研究公開促進費の採択・交付を受け、『東アジア都城の比較研究』として平成23年に刊行予定であり、さらにこのような研究成果とそこで構築された研究組織を受け、比較史的観点から通時的に把握する試みを行うことによって、日本の古代宮都を再度捉え直そうと試みることが必要であると考えるに至った。

２．研究の目的

本研究は、東アジア的な視点からする比較史的研究と、日本の古代宮都遺跡の通時的な変容とその背景を具体的に探る基礎的な研究とを並行して実施することにある。そして、これまで前者について基盤研究（A）で挙げてきた様々な研究成果と研究方法を後者の研究に応用し、もって両者の研究方法的統合と後者の研究の推進を組織的に図るものである。

まず、今日のように日々宮都遺跡の発掘調査が行われ、大量の調査データが蓄積されている状況にあっては、発掘調査機関を超えて日本の古代宮都の通時的研究を継続的に行う必要があり、それゆえに日本国内の行政発掘調査機関の研究者を含めて研究組織を構築する。具体的には、宮都遺跡を発掘担当する機関の中から、奈良県立橿原考古学研究所・大阪文化財協会・大津市埋蔵文化財調査センター・向日市埋蔵文化財センター・京都埋蔵文化財研究所より研究分担者あるいは研究協力者を選び、彼らとの共同研究や国内外の共同調査を通じて具体的な比較を行うことによって、日本の古代宮都間における共通点と差違点を事実として明らかにすることに研究の重点を置く。

また、その背後にある政治的・思想的・文化的な背景を東アジア諸国にまで範囲を広げて検討するために、基盤研究（A）を通じて築いた国際的研究体制をより堅固に構築し、その上で上記した日本の行政機関に属する発掘調査機関所属の研究者とこの国際的研究体制との連携も図りたい。さらに、今後とも長く継続して日本を中心とした東アジア諸国における都城研究、そしてその比較史的研究を推進し、国際的な貢献をも行おうとする土台作りを進めてゆくことを企図して

いる。

３．研究の方法

本研究では、基盤研究（A）での比較史的な研究の方法とその成果に基づき、そこで結成した研究組織を維持・発展させ、直接的な研究対象を日本古代の宮都に設定し、通時的な研究を緯、比較史的研究を経として、具体的な共同研究の方法として、⑴共同研究会の開催と⑵国内外の都城遺跡の調査とを両輪と位置づけ、日本古代宮都の通時的な共通理解を求めるべく研究を進めることとした。

⑴共同研究会−二つの系統・意図の異なる研究会の並行開催

①一つは、国内外の研究協力者を得て、⑵①の日本古代宮都遺跡の踏査と平行して、その遺跡の検討を中心とした研究会を開催し討論を行った。そして、これには必要に応じて海外研究協力者も招き、彼らの視点からする研究報告も受け、共に日本の宮都遺跡に検討を加えた。これによって、日本古代の宮都の全体像を通時的に理解するとともに、現在までの発掘調査や研究の現状と問題点を整理し、さらに今後の課題についても検討をおこなった。

②もう一つは、東アジア諸国における古代の都城と都城制に関する比較研究を、新たな課題の設定のもと、研究分担者を中心とした共同研究会を開催して継続・推進した。本研究期間では、基盤研究（A）で取り上げ得なかった課題の中から具体的に、１，京内の諸施設、２，東アジアの複都制の二つの課題を設定して研究を進め、その中から特に重点的に後者について検討を行い、⑵①の踏査においても意図的に踏査対象遺跡を選んで行った。

この両共同研究会が相まって東アジアにおける都城と都城制、特に日本の古代宮都のより具体的で基礎的で濃密な研究が可能となる。

⑵国内外の都城遺跡の調査−

①日本古代の宮都遺跡の調査を、各々の遺跡で発掘調査を現に担当している国・府県・市町村などの行政機関所属の研究者の協力のもとで実施する。そして、上記の遺跡が所在する現地で⑴①の研究会を開催し、調査遺跡に関する最新の情報を得るとともに、研究交流と今後の継続的な研究体制の構築を図る。具体的な調査対象遺跡は、奈良県所在の飛鳥、藤原、平城、大阪府所在の難波、滋賀県所在の大津、甲賀、保良、京都府所在の長岡、京都とその郊外である大阪府所在の交野地方などの宮都遺跡および関連遺跡地、そして福岡県所在の太宰府および福岡・佐賀・熊本各県所在のそれに関連した遺跡である。また太宰府との比較のために、古代の東北地方に作られた城柵遺跡などについても当該研究機関の協力を得て報告を得た。

②中国・韓国の都城遺跡の調査を、基盤（A）で様々な制約のために不十分であった調査地の追加調査と、未調査の遺跡の調査とを中心に海外研究協力者らとその所属研究機関等の協力のもと実施した。そのために新たな海外研究協力者を得ることにも努めた。調査対象地は、中国では西安とその近郊の都城遺跡とそれに関連した遺跡、また韓国では伽耶地域である。

４．研究成果

上記したように、本研究は個別の研究成果を求めるものではなく、またそれらを通じた結論を短期間に得ることも目的としていない。ただし別途電子ファイルを作成し、それに研究会での研究報告や都城遺跡の踏査など具体的な研究活動を通じて得られた多様な研究成果を盛り込み、新たに作成予定の HP を通じて広く社会に発信したいと考えている。ここでは基本的に本研究の外形的な成果を中心に記す。

(1) 日本古代の宮都遺跡の踏査と現地での研究会の開催を通じ、宮都遺跡の現状と研究課題を検討・整理した。

年度・回次		踏査対象（遺跡）	開催年月
平成19	1	初期の宮都遺跡 飛鳥・前期難波宮・大津宮・「藤原」京	18.9
	2	複都制下の宮都遺跡 恭仁京・甲賀宮・保良宮	18.11
平成20	3	後期の宮都遺跡 長岡京・平安京・郊外遺跡群（枚方市）	19.11
平成21	4	太宰府跡と関連遺跡 太宰府・関連遺跡（福岡市・前原市・基山町・）	21.11

表１　宮都遺跡踏査実施表

①宮都遺跡の踏査は計４回、毎回４日〜一週間程度のあいだ実施し、飛鳥から平安京まで、日本の古代宮都を網羅し、さらにそれと密接な関連をもつ太宰府についても踏査を行った。これらの踏査が実現したのは、研究分担者や研究協力者は勿論、現地で遺跡の発掘調査を担当する行政機関などに所属する研究者諸氏の全面的で献身的な協力があって初めてであった。これを通じて宮都遺跡をめぐる研究者の協力体制を構築し得たことは、今後の宮都研究にとって大きな研究力となる。また、回数は限られたが海外の都城研究者が日本の宮

都遺跡を実地に歩いたことの意義は、単に日本の宮都遺跡の紹介にとどまらず、これまで海外の研究者が日本の遺跡の踏査を殆ど行ったことがなかった点も考え合わせて非常に大きい。

②宮都遺跡の現地踏査に合わせ、宮都遺跡のある現地で４回の研究会を、主として各遺跡の調査の現状（調査成果を含む）と今後の課題という共通した課題設定で実施した。踏査に協力いただいた行政機関等所属の研究者による研究報告を主とし、関連した報告を研究分担者や国内外の研究協力者が行っただけではなく、太宰府での研究会では、比較の観点から、東北地方で城柵の発掘に携わっていた研究者を招き、併せて検討できたことも意義深い。

(2)共通課題を設定して行う研究会を開催し、基盤研究（A）から引き続き比較史的観点から東アジアの都城制と都城について検討する

①上記した宮都遺跡踏査に際して実施した４回の研究会も含め、計７回の研究会を開催し、二つのテーマについて継続して検討した。

年度	回次	共通課題	開催年月	備考
平成19	1	初期宮都遺跡発掘調査の現状と課題-飛鳥･藤原･難波･大津-	18.9	第1回踏査にともなう研究会
	2	複都制下の宮都遺跡の現状と課題-難波･恭仁･甲賀･保良- 東アジアの複都制-日本･中国-	18.11	第２回踏査にともなう研究会
	3	都城内部の施設	19.1	
平成20	4	後期宮都遺跡発掘調査の現状と課題-長岡･平安-	19.11	第３回踏査にともなう研究会
	5	再び東アジアの複都制-中国･渤海･朝鮮-	20.1	
平成21	6	太宰府跡と関連遺跡の発掘調査の現状と課題-附.東北地方城柵官衙遺跡との比較	21.11	第４回踏査にともなう研究会
	7	中近世中国の複都制	22.1	

表２　研究会実施表

一つは「都城内の諸施設」、今一つは「東アジアの複都制」である。前者についてはさらに個別の施設に対する検討が必要であり、今後さらに継続することとした。また、後者については踏査に伴う研究会で一度、定例の研究会で二度とりあげ、本研究期間における中心的な検討課題とした。それは、宮都が平安京に固定されるようになるまで、実質的に日本古代宮都の歴史と並行して行われた制度であり、平安京までの宮都を考える上で、制度的に極めて重要な問題である。しかし古代国家の基本法である律令にはそれを制度化した明文はなく、史料的にも制度化されたものとみるには問題があり、唯一主都たる要件は日本に固有の主都の行政組織京職の存在にあることを確認した。発掘調査などによっても複都を構成する主都と副都について検討したが、遺物や遺構の上でまだ明確な差異を見いだし得ていないなど、問題点も残った。

②比較の観点から東アジアに共通した複都制を取り上げ、制度は勿論、制度下における都城を検討した結果、多様性が顕著であることを明らかにした。すなわち、中国においては、漢代から清朝にかけて 2000 年以上にわたり多くの王朝で複都制が採用されたが、それには東西両都制と、五京制など多数の複都からなるものがあり、その制度の内容も意味も区々である。朝鮮半島では古代において明確な複都制は存在せず、10 世紀高麗王朝になって初めて複都制が実現されると考えられる。この点については本研究での検討を受け、本研究の連携研究者である田中俊明を代表として応募した科学研究費補助金が採択され（基盤研究（B）海外調査「朝鮮史における複都・副都の位置・構造・機能に関する調査研究」課題番号 10004222、平成 22-25 年度)、朝鮮半島における複都制については今後当該研究課題において引き続き検討されることになった。日本では、唐の東西両都制（いずれも主都たり得る制度）から五京制（主都はいずれか一つで、残る副都は特定の機能をもつに止まる）への転換期である 7 世紀後半に複都制が始まり、むしろ日本における複都制の全盛期と考えられる 8 世紀中頃には一旦両都制に近い複都制が志向されるなど、中国の当該時期の様相とはやや状況を異にする。

なお、上記の研究会ではゲストスピーカーとして、日本は勿論、中国・韓国の研究者も招き、連携研究者や内外の研究協力者だけではカバーできない時代と地域の都城遺跡に関して、最新の研究状況を報告いただくとともに、比較の観点から多角的な検討を行った。

(3)東アジア諸国の都城制および都城に関する国際的な研究協力体制をさらに進展・構築した。

基盤研究（A）では、中国については中国社会科学院考古研究所、韓国については国立文化財研究所の研究者との協力体制を重視したが、本研究ではさらに各々において研究体制の広がりと深まりを一定度達成できた。

①中国では、中国社会科学院考古研究所で漢長安城を調査する西安研究室漢長安城隊、さらに西北大学文博学院考古系の協力を得て漢

長安城はもとより、それに関連する陵墓や離宮・苑池などの踏査を、山口大学人文学部の研究プロジェクトと協力して実現し、今後の西安を中心とした中国諸地域における研究への協力も確約を得た。また、南京大学歴史系とも交流し、江南地域の都城調査と研究への協力についても確約を得た。
②韓国では、基盤研究（A）以来、各地所在の国立文化財研究所の研究者の協力を得てきたが、今回は韓国伽耶・百済地域での調査と研究会での研究報告や討論を通じて、さらに忠南大学校や公州大学校の研究者との協力関係も深まり、特に忠南大学校の研究者とは今後の継続的な共同研究について同意を得た。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 22 件）
①橋本義則, 平安宮の中心-中院と縁の松原をめぐる憶説-, 平安京とその時代, 207-234, 2010, 査読無
②妹尾達彦, 農業―遊牧境界地帯と隋唐長安城, 都市と環境の歴史学, 2(増補版), 239-301, 2009, 査読無
③妹尾達彦, 隋唐長安城と世界史の構造, 妹尾達彦, 歴史地理教育471, 10-17. 2009, 査読無
④田中俊明, 朝鮮三国の都城と中国, 都市と環境の歴史学, 査読無, 2（増補版), 427-448, 2009
⑤山中　章, 難波解体と長岡京遷都―「大和」との決別」, 桓武と激動の長岡京時代, 山川出版, 148-172, 2009査読無,
⑥山中　章, 古代宮都と周辺都市ー山崎院から都市・山崎への変貌, 現代に生きる遺跡　古墳時代の備讃瀬戸　都城周辺の都市的景観(シンポ ジウム記録 6), 考古学研究会例会委員会, 207-223, 2009, 査読無
⑦新宮　学, 北京遷都研究の現状と課題, 都市と環境の歴史学(増補版), 2, 141-168, 2009, 査読無
⑧新宮　学, 近世中国における皇城の成立, 新宮学, 都市と環境の歴史学, 4, 255-293, 2009, 査読無
⑨林部　均, 飛鳥・藤原京の実像, 都市と環境の歴史学, 2(増補版), 507-544, 2009, 査読無
⑩林部　均, 飛鳥・藤原京研究の現状と今後の展望, 都市と環境の歴史学, 4, 463-486, 2009, 査読無
⑪林部　均, 飛鳥宮 - 大極殿の成立 - , 都城制研究, 2, 17-36, 2009, 査読無
⑫橋本義則, 日本古代宮都と後宮, 都市と環境の歴史学, 2(増補版), 579-624, 2009, 査読無
⑬橋本義則, 東アジア比較都城史の試み-東亜比較都城史研究会五年のあゆみ-, 都市と環境の歴史学, 4, 498-522, 2009, 査読無
⑭妹尾達彦, 円仁の長安―9世紀の中国都城と王権儀礼, 中央大学文学部紀要, 221, 17-76, 2008, 査読無
⑮田中俊明, 朝鮮三国王都の変遷, 田中俊明, 古代東アジア交流の総合的研究(国際日本文化研究センター共同研究報告書), 417-436, 2008, 査読無
⑯林部　均, 古代宮都からみた天武・持統朝, 大化改新と古代国家誕生, 新人物往来社, 158-163, 2008, 査読無
⑰妹尾達彦, 都の建築, 妹尾達彦, 中央大学人文科学研究所紀要, 61, 41-79, 2007, 査読無
⑱田中俊明, 高句麗平壌都城と王宮城, 馬韓・百済文化, 17, 韓国円光大学校馬韓・百済文化研究所, 59-82, 2007, 査読無
⑲新宮　学, 明代南京の京城と外郭城について, 明代中国の歴史的位相, 汲古書院, 23-43, 2007, 査読有
⑳新宮　学, 遷都と王権―明王朝の場合, 中国の王権と都市―比較史の観点から―, 大阪市立大学大学院文学研究科・都市文化研究センター, 83-106, 2007, 査読無
㉑林部　均, 飛鳥の諸宮と藤原京 - 都城の成立 - , 都城　古代日本のシンボリズム, 青木書店, 3-36, 2007, 査読無
㉒林部　均, 古代宮都の成立と土器様式, 考古学論究, 真陽社, 1031-1055, 2007, 査読無

〔学会発表〕（計９件）
①橋本義則, 東アジア比較都城史の試み-東亜比較都城史研究会五年のあゆみ-, 南京大学歴史系学術講演会, 2009年9月17日, 中国南京大学歴史系
②橋本義則, 日本古代宮都研究の諸問題, 近世東アジア比較都城史研究会, 2009 年 6 月 28 日, 山形大学
③橋本義則, 東アジア比較都城史の試み-東亜比較都城史研究会五年のあゆみ-, 国際

シンポジウム「都市と環境の歴史学：５年間の成果」,2009 年 3 月 15 日,中央大学
④橋本義則,ふたたび文献史料から見た日本古代の複都制,東アジア比較都城史研究会,2009 年 1 月 11 日,山口大学
⑤橋本義則,日本古代都城制研究の最前線－新しい研究方法とその成果－, 韓国昌原大学校人文大学主催日本山口大学招聘国際学術セミナー「韓日における王権と戦争」,2008 年 10 月 1 日,昌原大学校人文大学
⑥橋本義則,日本の古代宮都と葬地,中央大学人文科学研究所公開研究会,2008 年 2 月 20 日、中央大学
⑦橋本義則,日本古代宮都の内部施設,東アジア比較都城史研究会, 2008 年 1 月 6 日, 山口大学
⑧橋本義則,日本古代の複都制について,東アジア比較都城史研究会, 2007 年 11 月 25 日, 山口大学
⑨橋本義則,日本古代の後期宮都-平城京から長岡・平安両京へ-, 国際日本文化研究センター共同研究会「古代東アジア交流の総合的研究」「古代東アジアの都市 2」,2007 年 10 月 21 日, 国際日本文化研究センター

〔図書〕（計３件）
①林部　均,飛鳥の宮と藤原京,吉川弘文館,259,2008
②林部　均,飛鳥京跡,Ⅲ(奈良県立橿原考古学研究所調査報告第102冊),奈良県立橿原考古学研究所,253,2008
③橋本義則,東アジア諸国における都城および都城制に関する比較史的総合研究(平成16ー18年度科学研究費補助金基盤研究(A)報告書)(CD-ROM),890,2007

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
橋本義則（HASHIMOTO YOSHINORI）
山口大学・人文学部・教授
研究者番号：60164802

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
妹尾達彦（SEO TATSUHIKO）
中央大学・文学部・教授
研究者番号：20163074
田中俊明（TANAKA TOSHIAKI）
滋賀県立大学・人間文化学部・教授
研究者番号：50183067
山中　章（YAMANAKA AKIRA）
三重大学・人文学部・教授
研究者番号：40303713
新宮　学（ARAMIYA MANABU）
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：30162481
馬　彪（MA BIAO）
山口大学・人文学部・教授
研究者番号：20346539
黄　暁芬（HUANG XIAO-FEN）
東亜大学・総合人間文化学部・客員教授
研究者番号：20330722
林部 均（HAYASHIBE HITOSHI）
奈良県立橿原考古学研究所・埋蔵文化財研究部・総括研究員
研究者番号：70250371

(4) 研究協力者
朴　淳發（PARK SUNBAR）
韓国・忠南大学校・教授
陳　良偉（CHEN　LIANWEI）
中国・中国社会科学院考古研究所・研究員
積山　洋(SEKIYAMA HIROSHI)(2008ー2009)
大阪歴史博物館・研究副主幹
吉水眞彦（YOSHIMIZU MASAHIKO）（2008ー2009）
大津市埋蔵文化財センター・センター長
網　伸也（AMI NOBUYA）（2008ー2009）
（財）京都市埋蔵文化財研究所・研究員
井上信正（INOUE NOBUMASA）（2008ー2009）
太宰府市教育委員会・技術主査
中島信親（NAKAJIMA NOBUTIKA）（2008ー2009）
（財）向日市埋蔵文化財センター・技師